HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニューヨーク市のアフリカ人埋葬地プロジェクト : 生物考古学におけるより高い倫理基準を求めて
Author(s)	ブレイキー, マイケル L
Citation	アイヌ・先住民研究, 4, 213-232
Issue Date	2024-03-29
DOI	10.14943/Jais.4.213
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91327
Type	bulletin (article)
File Information	13_4_blakey.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アイヌ・先住民研究　第４号　2024　p.213–232　ISSN 2436-1763
Aynu teetawanoankur kanpinuye (4) 2024　p.213–232　DOI 10.14943/Jais.4.213

【シンポジウムの記録・3】

ニューヨーク市のアフリカ人埋葬地プロジェクト：生物考古学におけるより高い倫理基準を求めて

マイケル・L・ブレイキー *

要　旨

アフリカ系アメリカ人の政治思想と科学的実践は、長い間、アクティヴィズムとパブリックな面をもつ学問の両輪により構成されてきた。 被抑圧者のニーズによって研究が導かれることを求めるこの考え方は、集団の権利を表現するための科学的手段を提供し、多元的民主主義における過去についての議論では､被抑圧者たちの声を高めることになる。ニューヨーク市のアフリカ人埋葬地プロジェクト（1992年～ 2009年）では、公共関与（パブリック・エンゲージメント）とは「クライアントを優先するモデル（clientage model)」がその一例となった。 このプロジェクトでは、人類学者が公共関与を通じて、アフリカ系アメリカ人の子孫となるコミュニティから提案された研究課題を追求し、非常に多様な研究チームを生み出し、倫理を重んじ、生物考古学を刷新し、他に類を見ない洗練された手法と報告書を作成した。科学的中立性とは、客観的に検証不能であるにもかかわらず、啓蒙思想に組み込まれた主観性の否定という信仰により成り立つ。それとは対照的に、このプロジェクトは科学に内在する主観性を認めることが、いかに公共的・科学的利益に結びつくかの例証となっている。この主観性という視点は重要である。 今日、米国歴史保存ナショナル・トラスト［米国の非営利団体］（2018年）は、あらゆる遺跡や博物館において、アメリカの歴史を語る上での子孫となるコミュニティのエンパワーメントを支援している。「クライアントを優先するモデル」は、私たちの世界のどこでも、誰にでも知の民主化に役立つかもしれない。

はじめに

ニューヨーク市のダウンタウンで 1989 年、34 階建ての連邦政府オフィスタワーの建設準備のために行われた考古学調査によって、アフリカ人埋葬地が再発見された。アフリカ人埋葬地には、18 世紀を通じてニューヨーク市とその富の多くを築くことに貢献した、推定 15,000 人（市の人口の 20％）の隷属化されたアフリカ人たちが埋葬されていたことが判明した。 アメリカ合衆国の歴史では、建国当初の北部植民地における奴隷制度は見過ごされ、その悲惨な制度は南部だけに存在していたかのように語られることが多かったため、多くの人びとにとり、その発見は驚きであったに違いない。

*　米国国立人文科学基金人類学・アフリカ研究・アメリカ研究教授、歴史生物学研究所創設ディレクター、ウィリアム・アンド・メアリー校（米国バージニア州ウィリアムズバーグ）

［図 1-1992 年、発掘、建設中のアフリカ人埋葬地］

1990 年代初頭、埋葬地を破壊してしまう建設計画は、神聖な場所の保存を願うアフリカ系アメリカ人のアクティヴィストや議員たちから激しい反発を受けた。こうした政治的論争の中、政府と契約した考古学者たちは、建設着手を前に 419 体の骨格になった遺体を発掘した。

1994 年までにアフリカ系アメリカ人は、発掘と建設を阻止するために政治を動かすことに成功した。1992 年、遺跡の歴史を保存するために、考古学者、生物人類学者、歴史学者からなる広範なチームが結成され、アフリカ系アメリカ人コミュニティによる遺跡の管理を支援し、遺跡が語る過去の物語を保全したいという願いのもと、この論争に加わった。 そのチームは、「子孫となるコミュニティ」（「倫理的な依頼人」）の意向を受けた学者だけが調査を実施するという「クライアントを優先するモデル（clientage model）」を策定し、コミュニティの代表者が再埋葬前の一時的な研究に値すると合意した研究課題だけを採用することにした。

（私が指揮をとった）アフリカ人埋葬地プロジェクトでは、アフリカ系アメリカ人の代表的研究機関（ハワード大学）を拠点とすることになった。最終的には、他の 8 つの大学や研究所に所属する 30 人以上の博士、200 人以上の学生や技術者からなる学際的研究チームが参加し、プロジェクト予算は 500 万米ドルを超えた。最終的に、一般市民と学者の協力により、その聖地に全米国定史跡とビジター・センターが設立され、これまでに報告された中で間違いなく最も洗練された生物考古学の書物 3 巻（総 2,500 頁）が出版された（Blakey and Rankin-Hill 2009、Perry et al. 2009）。

問題点

まず、ニューヨーク市のプロジェクトで導入された〈インフォームド・コンセントの倫理〉と対比させるために、倫理的とは言えない誤解を招くような〈人種に関する科学〉という、このプロジェクトとは対照的ではあるが、同時代の話を紹介したい。ある人の視点は、その友人によって定義されるのと同様に、その人の敵対者によっても定義されるからである（Blakey 2020）。

アフリカ人埋葬地が明らかになった1990年代、スミソニアン自然史博物館の法［医］人類学者（forensic anthropologists）たちは、北米先住民たちがかねてから求めていた「アメリカ先住民墓地保護ならびに返還法」（NAGPRA, 1990）の成立により敗北し、何万体というインディアンの遺骨を文化的関連性のある部族に返還することを要求された。

しかし、［スミソニアン自然史博物館の］研究者たちは、ワシントン州ケネウィクにある最古の遺骨が語るかもしれない物語を探究しようという目的で、その遺骨をけっして手放そうとはしなかった。1980年代からずっと、先祖の遺骨に対する先住民の権利に反対してきた学者たちは、9,500年前のケネウィクの男性の遺骨（ウマティラ族は彼を祖先第1号の意味を持たせて「古［いにしえ］の人（エンシェント・ワン）」と呼んでいた）頭部の分析から、その人種を現在のインディアンよりもよりユーラシア人に近い形をしていると結論づけた。そのため研究者たちは法廷で、古の人は現在のネイティブ・アメリカンとは文化的に関係がないと主張した。研究者たちはこの最初のネイティブ・アメリカンを白人（アイヌを分類したようにコーカソイド）か、あるいはユーラシア人に分類し、ヨーロッパ人が最初に新大陸を手に入れたという興味深いストーリーを捏造しただけでなく、遺骨の所有権に関する北米先住民の法的権利という主張を回避し、古の人からほぼ20年間に渡って試料を採取し続けた。

もちろん、進化論者なら容易に予想できるように、古の人の頭の形は現在のアメリカ・インディアンの頭骨とは異なっていた。インディアンの起源は北東アジアにある。古の人はまさに古代のインディアンの姿をしているはずだが、［スミソニアン自然史博物館の］研究者たちは人種概念を前提にし、この骨格を「白人種（コーカソイド）」と呼んだ。つまり、古の人は時空間から切り離され、イギリス人との親近性を偽装されてしまったといえる。

しかし、デンマークの遺伝学者（Rassmussen 2015）は、古の人が遺伝学的に他のどの人類グループよりも北米先住民に似ていることを証明した。2017年、［スミソニアン自然史博物館の］研究者たちの手元に25年間も保管されてきたその遺骨は、子孫たちの手により再埋葬された。これら白人の自然人類学や考古学者たちは、人種を客観的［分類］手法だと考えていた。確かに、彼らはケネウィク・マンを客体化し、自分たちに帰属するモノとして考えていたのである。

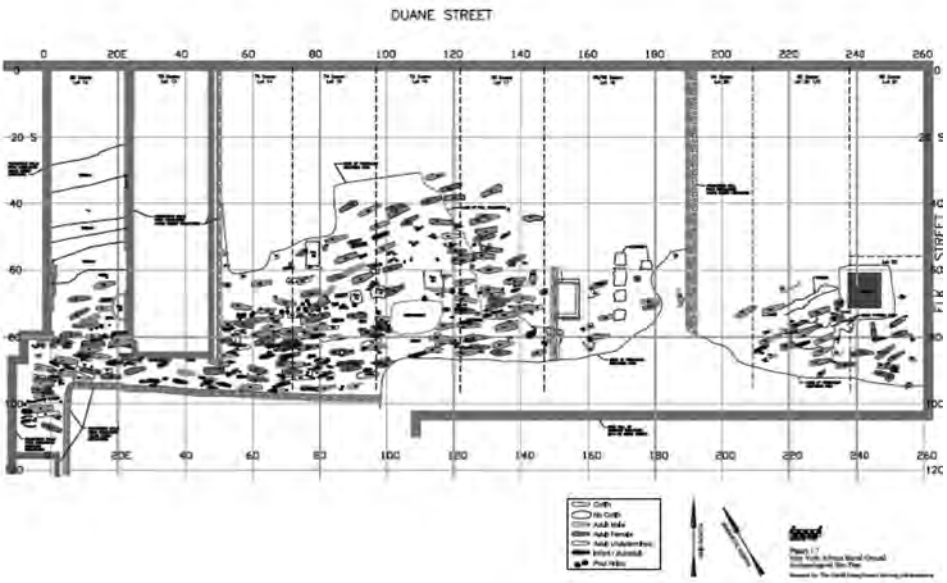
私とは同一の研究領域で仕事をしてきたダグ・アウズリーとリチャード・ジャンツや他のメンバー（2014）たちは、テネシー大学のウィリアム・バスの下で学んだ研究者である。ウィリアム・バスは、人種概念を未だに信じる法［医］人類学者で、時折行方不明になった人たちに関する諸情報——人

種、性別、年齢、身長など――を、彼の職務の一部として、警察や裁判所に提供する仕事をしている。客体化された人種とは、文化的歴史によって定義された集団ではなく、あたかも本質化され自然化されたモノであるかのように、（客体化と脱歴史化であり）非人間化の事例ともいえる。 このような長年のアプローチは、科学的解釈が何らかの形で中立的であるという考えによっているが、この考えには何の証拠もない。

そうではなくて、科学者であり観察者という中立的カテゴリーが、じつは白人アメリカ人の歴史的主体性を意味しており、自らにとり都合のいい答えを探しているにすぎないという証拠なのである。先祖の遺骨の扱い方を決定する、文化的関連性を有する部族の子孫の法的権利にさえ反し、これらの研究者たちは、有無を言わさず遺骨を持ち去ったのである。これらの研究は、インフォームド・コンセントに明確に違反している。長年慣習化されてきたとはいえ、非倫理的であるという誹りを免れない。

いまから 30 年前、ニューヨーク市に 300 年前につくられたアフリカ人埋葬地を分析する権利を主張してその現場にいたのは、自らの研究において人種概念を暗黙の前提にした法［医］人類学者たちだった。私たちハワード大学の研究チームは、（共同体アクティヴィストたちの下で）この遺跡の考古学調査を引き継いだだけでなく、考古学をアフリカ系アメリカ人のための、アフリカ系アメリカ人による、人道的な歴史の自己発見へと考古学を変貌させた。

北米先住民の場合、子孫となるコミュニティが考古学の発掘現場から出土する遺骨の管理権をもつことは、すでに「アメリカ先住民墓地保護ならびに返還法」により保証されていたが、その考えをすべての人に対し適用するという前例を築いた。こうして私たちは、一般市民が参加する「クライアントを優先するモデル」を通じて、「インフォームド・コンセント」という基本的な倫理原則に基づき、子孫の許可を得た場合にのみ調査をおこなうことを選択した（Blakey 2010）。



［図 2- 現場地図 この地図は、マンハッタンにアメリカ合衆国一般調達庁がオフィスタワーを建設する際に発掘された 419 人を示している。］

［図 3- 抗議活動 1990 年代、アフリカ系アメリカ人は、考古学者と連邦開発業者による墓地の冒涜に対する抗議活動を主導した。］

解決策

私たちは、公共関与を土台にした「クライアントを優先するモデル」を制度化した。つまり、このモデルでは、（クライアントとして倫理的責任を負う）アフリカ系アメリカ人コミュニティが、研究調査を許諾する権限をもち、そしてもし調査を許可する場合には、過去に関するどのような疑問が探究に値するかをも決定するのである。私たちは1年間、子孫を中心とする連邦諮問委員会（通称「運営委員会」）と公開公聴会で数回にわたり会合を開いた。そこでは、クライアントが調査を許可した場合には、研究計画書を作成する段階でクライアントの望む研究課題をそのなかにどう反映させるか、議論を積み重ねた。

［図4 -「クライアントを優先するモデル」］
※公的関与にもとづく調査において報告了承された「クライアントを優先する（Cliantage）」デザイン

図4で説明したい。私たちは第一のクライアントである倫理的権利を持つ子孫の代表者（倫理的な依頼者）に対し、学者（プロフェショナル）としてこのプロジェクトに関与する際の実証的研究の実践について、説明責任を負う。と同時に、調査の経済的補助をするいわば「ビジネス・クライアント」（この場合、連邦政府の一部である一般調達局）との契約義務が、私たちの原則的な倫理的義務と矛盾しないようにすることであった。子孫となるコミュニティの調査上の（答えではなく）疑問を取り入れることは、私が「知の民主化」と呼ぶものであり、調査研究に関する認識論的領域のアカデミズムを超えた拡大を意味する（Blakey 2008 参照）。私たちは、1）アフリカ人の起源、2）アフリカ系アメリカ人への文化的･生物学的変容、3）隷属下でモノとして扱われた「生活の質」あるいは「状況」、4）アフリカ系アメリカ人の抵抗様式、という4つの問いを設定した。コミュニ

ティとともに、私たちは客体化する「奴隷」という呼称ではなく、「隷属化されたアフリカ人」という表現などを含め、彼らの用いたい呼称を広く社会一般に紹介した。そして、コミュニティからの正式な承認を得て、私たちは黒人コミュニティのために包括的な生物考古学プロジェクトを開始したのである。

［図 5 -「絆のセレモニー 」（TIES THAT BIND CEREMONY、1994 年）。劇作家エレノア・トレイラーらが企画した大規模な「絆のセレモニー 」により、遺骨はハワード大学に運ばれた。］

ハワード大学コブ研究所にはアフリカの神像であるエフェの祠があり、10 年間の研究期間中、世界中から定期的に見学者が訪れた。私たちはこれらの遺骨を、法［医］人類学たちがおこないがちな「黒人種（Negroids）」として客体化せず、私たちが記憶に残すよう復原したアフリカ、カリブ海地域、ニューヨーク市で生活していた先祖のものだということを確信していた。

目標の達成には、ほかの研究者の協力も必要だった。ニューヨークへの移住を余儀なくされ、そこで亡くなった人々の経験をうかがい知るために、これらの先祖が歩いたさまざまな土地に精通した歴史や生物文化の研究者たちの専門的知識が不可欠であり、彼（女）らの協力を仰いだのである。これは死者の研究というよりも、先祖が生きた実生活についての研究である。私たちは、インフォー

ムド・コンセントがあれば、人道的・倫理的原則を守りながら、よりよい科学が実施できると主張した。

2003 年、ショーンバーグ・センターが主催した「先祖の帰還の権利（Rights of Ancestral Return）」とともに、私たちとコミュニティの協働作業の一部は、神聖な場所に先祖の遺骨を再埋葬することであった。

［図 6 と 7 - 祖先の帰還の権利］

2007 年までに、(この場所の開発を担当していた) アメリカ合衆国一般調達庁が建物の壁にプレートを設置すればことたりると想定していた場所は、国立公園局の管理下にある全米国定史跡(ナショナル・モニュメント) の一つに昇格したのである。

[図 8- アフリカ系埋葬地全米国定史跡 (ナショナル・モニュメント)]

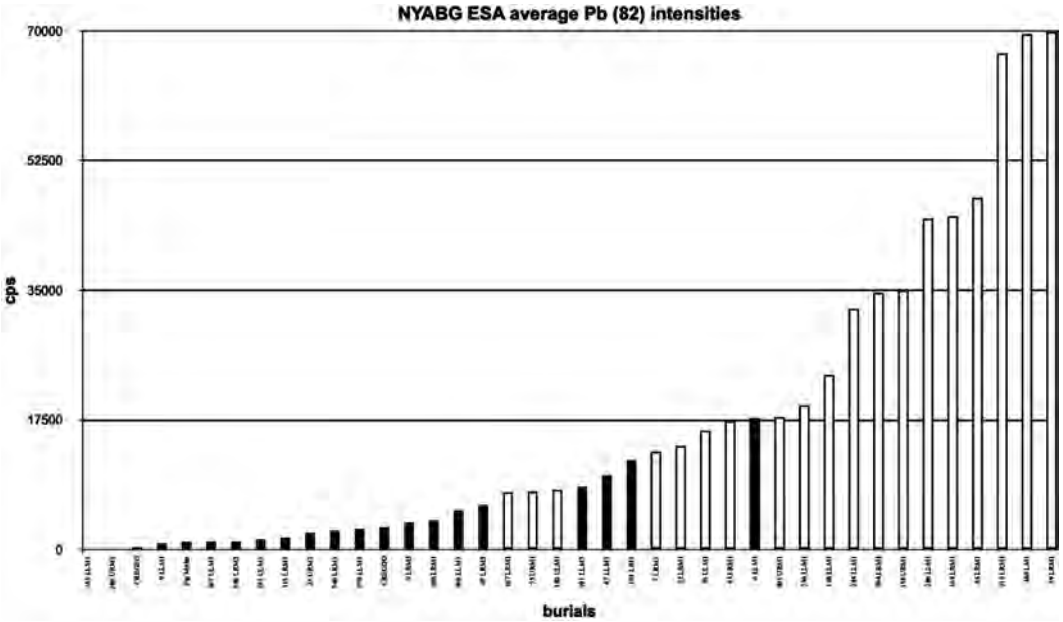
連邦政府が最初に主張したものより何倍も大きなビジター・センターは、アクティヴィストたちの長い闘争の末、2009 年にオープンした。その闘争の過程で、「9.11 事件」により世界貿易センタービル内の考古学研究室が破壊されたことで中断を余儀なくされたこともあった。一般調達庁は、1990 年代にアクティヴィストたちの活動が隆盛をきわめてきたころに合意した広範な調査を何度も中止させようとした。しかし、ほとんど例外なく、一般調達庁の目論見は失敗に終わったのである (Blakey 2020)。

私たちが率いたアフリカ系アメリカ人の研究チームは、人類学研究者としてはアメリカで最も多様な人種が集まったチームといえるが、チームのメンバーたちもブロードウェイ 290 番地での改葬と献堂式に参加した。私は、ウィリアム・アンド・メアリー大学に歴史生物学研究所を設立し、ハワード・プロジェクトを完成へと導き続けることになる。現在でも、そこで私たちは、このプロジェクトのより大きな波及効果を目指して活動を続けている。

分析結果

以下はその分析結果の一部である。隷属化された子供たちは死者の40％を占め、18世紀には当時の英国人に比べて少なくとも2倍の乳児死亡率を示した（この相対的な差は現在も続いている）。ここに示した、成人まで生きた人々については、25歳を除くすべての年齢で、英国人よりもアフリカ人のほうの初期死亡率が高かった。高齢者（55から60歳以上）はほぼ死に絶えた。アフリカ人でそこまで長生きしたのはわずか2～3％だった。快適な生活のために労働を強いられていたアフリカ人に比べ、7から9倍のイギリス人男女が老年まで生きた（Rankin-Hill et al. 2009）。

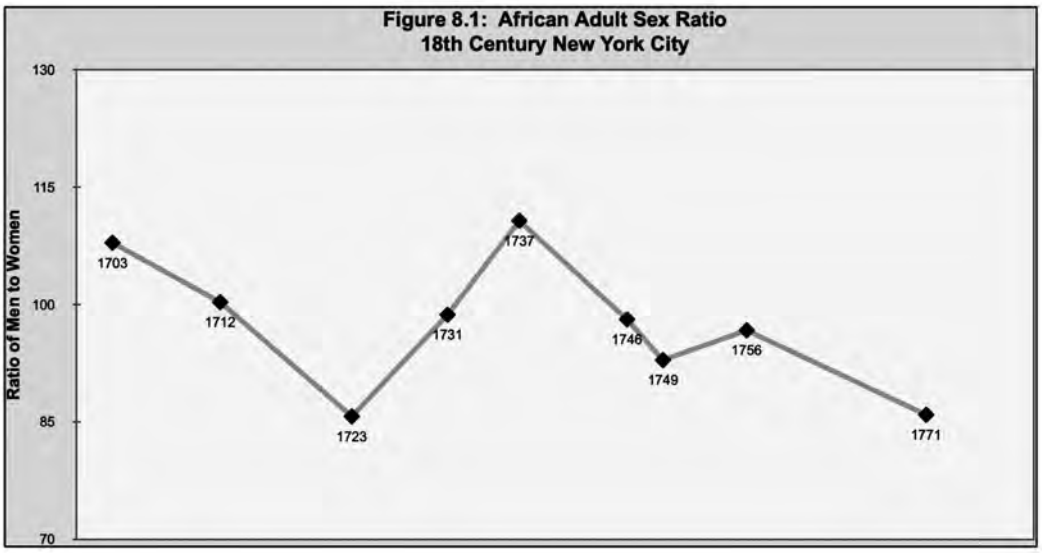
私たちの起源探し［隷属化されたアフリカ人と英国人との死亡率の差］は、新たな研究手法を生んだ。たとえば、幼少期のアフリカの生態の証拠を得るために歯の化学的性質を調べることを最初に提案したのは、私たちだ（Howard University and John Milner Associates 1993, Blakey and Rankin-Hill 2016を参照）。幼少期に発達した歯のエナメル質を検査し、ストロンチウムのような同位体や、世界のさまざまな地域の特徴を示す鉛のような元素を調べた。当初、私たちは、（通常は西アフリカや西中央アフリカで生まれ育ったことが知られている）ヤスリで削られた文化的に変工された歯を持つ人と、ニューヨークで子どもの頃に死亡した（つまりニューヨークで生まれた可能性が高い）人の、歯の化学的性質を比較した。その結果は次のとおりだ。



［図9-歯における鉛の徴候のグラフ］, from A. H. Goodman, Joseph Jones, Mark E. Mack, D. Amarasiriwardena, R. Burton, and D. Coleman. 2009. 'Isotopic and Elemental Chemistry of Teeth,' in M.L. Blakey and LM Ranikin-Hill (eds.) The Skeletal Biology of the NewYork African Burial Ground, p.116.

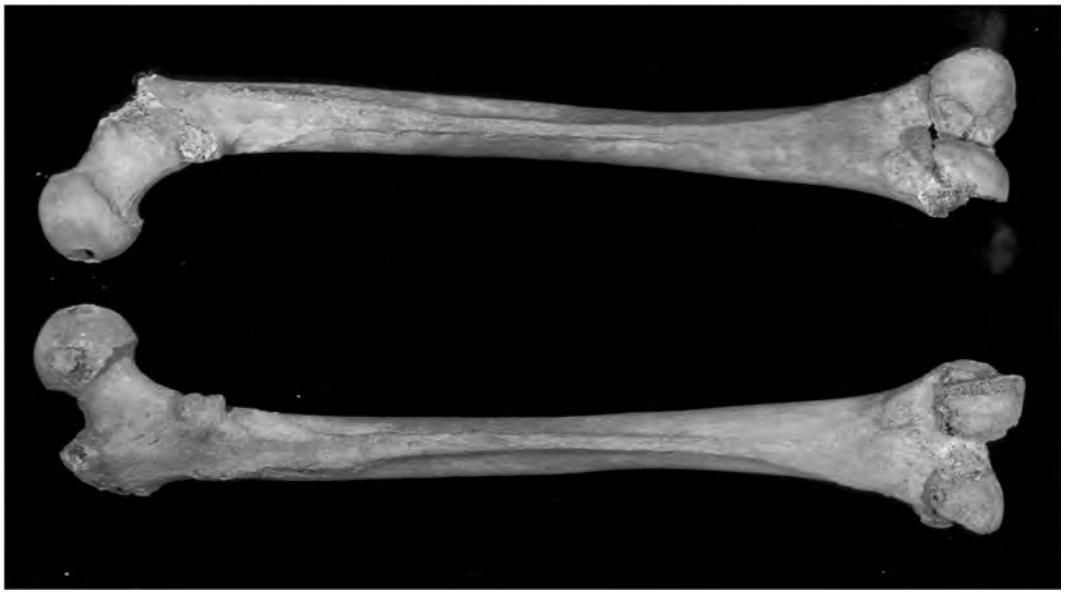
アラン・グッドマンら（Goodman 2009［最初の報告は 2004］）の最初の分析結果によると、西洋近代技術に直面する際に鉛への暴露を示す化学的徴候を持つ人々と比較して、ヤスリで削られた歯を持つ人々は子供の頃に死亡しやすく、かつ鉛のレベルが非常に低かった。私たちがその検査法を発明した化学物質の判定法は、人々が育った「状況」に基づいて地理的な移動を追跡するための重要な手法となった。現在、マイケル・ウェスタウェイ（クイーンズランド大学）は、アボリジニ・オーストラリア人の遺骨を返還すべきオーストラリア国内の場所を特定するために、この手法を用いている。祖先の地域的アイデンティティを理解するための一助として、さまざまな環境で養育されたことに関する証拠は、自然科学的な DNA 鑑定による大まかな確率的関連性よりも質的に確かなものになった。それにもかかわらず、ニューヨーク市におけるアフリカ人の文化的起源を大まかに推定するために使用される数多くの証拠の一つとして、DNA 鑑定が初めて使用されたことに、誰もが熱狂していた（Jackson et al. 2009）。 私たちが関与したプロセスを通じて黒人コミュニティが初めてこの起源に関する疑問を投げかけるまで、遺伝学者がその起源について尋ねたことすらなかったということになる。

1700 年代を通じて、ニューヨーク市の隷属化されたアフリカ人社会における男性の比率は減少していった。植民地で男性の割合が最も高かった時期は、1712 年と 1741 年のアフリカ人反乱の頃である。これらの反乱の後、アフリカ人女性と子供の輸入が増加したのは、イギリスがより大きな社会統制を図ろうとしたせいなのかもしれない。ここでは、国勢調査のデータを使って男女比（性比）の変化を見ることができる。



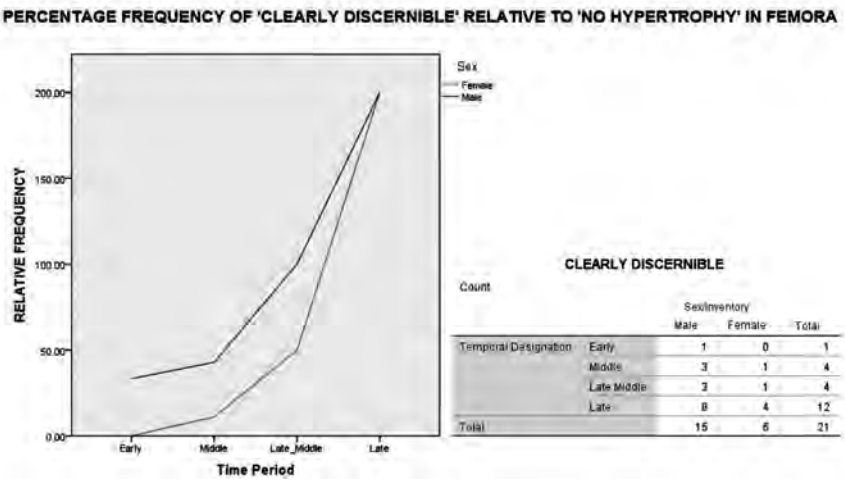
［図 10 - 国勢調査による男女比の変化］, M.L. Blakey and LM Rankin-Hill (eds.). The Skeletal Biology of the New York African Burial Ground, p.265.

18 世紀後半に女性が労働力をより多く提供するようになると、都市化がより進行した都市部での労働は家庭内労働へと変化し、奴隷制度はより穏やかなものになったと主張する人もいた。 おそらく前者は部分的には真実だろう。しかし、私たちが筋肉変化で発見したことは、その世紀の間に、すべての隷属化した労働者、特にアフリカ人女性の肩、背中、太ももに、ますます多くの仕事がのしかかっていたことを示している。つまり、女性奴隷への労働はより過酷になったのである。私たち（Blakey et al. 2019）は最近、太ももの裏側にある長い筋肉の付着部（大腿線）に注目した。死者たちの骨には、その重労働の痕跡が残されている。



［図 11- 肥大した線状突起を持つ女性の大腿骨］※推定 35 歳から 49 歳

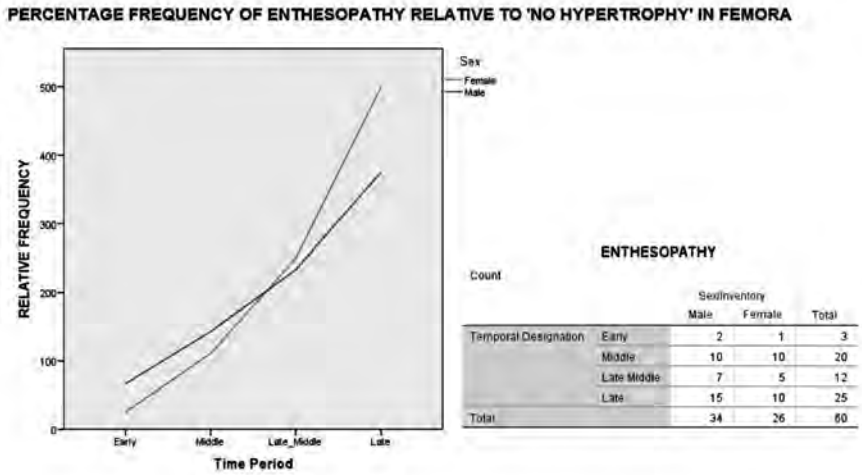
線状体肥大を持つアフリカ人の数は、18 世紀の間に相対的に増加する。女性の筋肥大の頻度は増加し、18 世紀末の独立戦争の頃には、女性の過酷な労働の記録は男性のそれに匹敵するようになる。



		Sex/Inventory Male	Female	Total
Temporal Designation	Early	1	0	1
	Middle	3	1	4
	Late Middle	3	1	4
	Late	8	4	12
Total		15	6	21

［図 12- 肥大症］

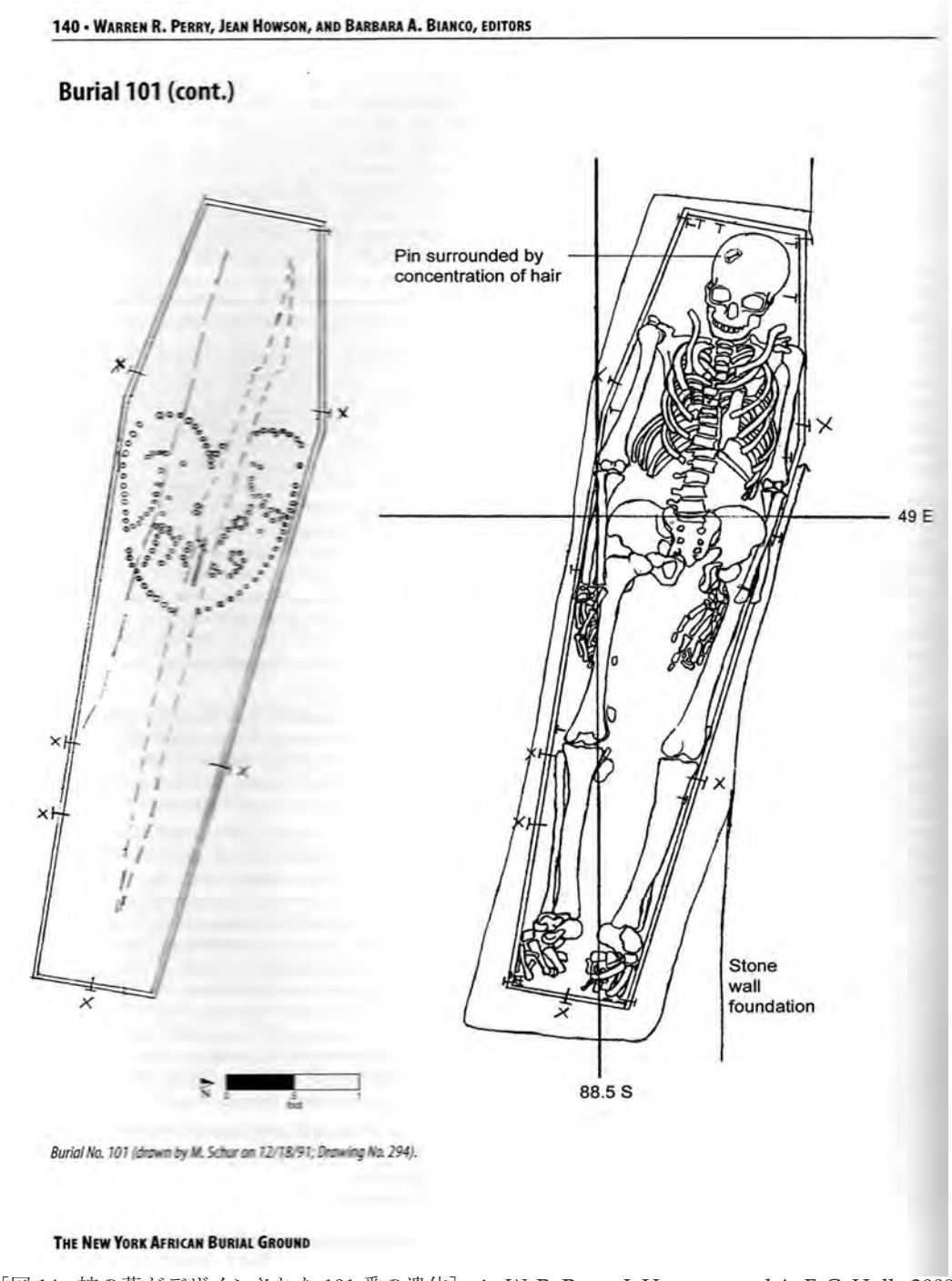
筋肉の付着部症（enthesopathy）は、通常の肥大を超えるもので、筋肉の付着部の断裂を含む過度の緊張の証拠である。18 世紀の間に、筋肉の付着部症の頻度が増加していることが、ここで示されている。女性の労働による筋肉への負担は、徐々に男性のそれを上回るようになる。こうした事実を知るには、骨格生物学以外に方法はない。そうでなければ、人種化した頭をもったこの領域の研究者たちは、これらの違いを歴史的背景から切り離して示すことで、「人種」の決定的特徴（白人種よりも黒人種の方が男女の形態差である「性的二型」が少ない）として誤解してしまうかもしれないだろう。



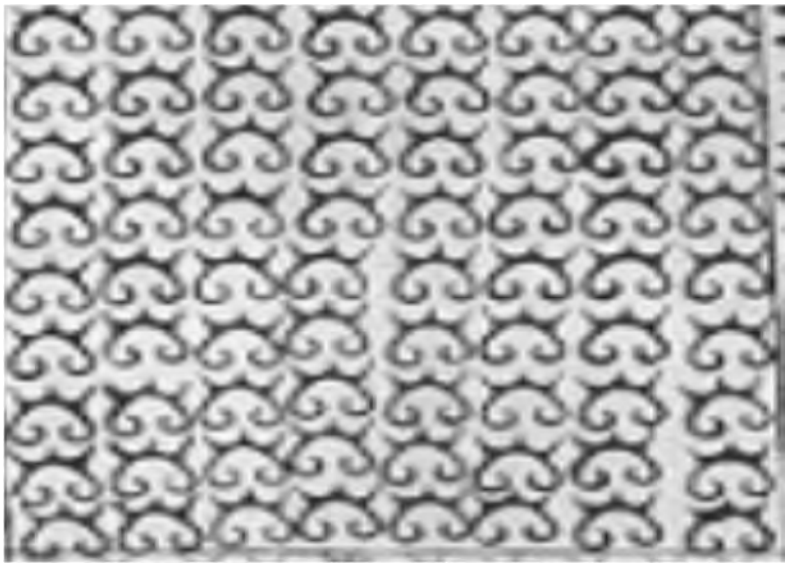
		Sex/Inventory Male	Female	Total
Temporal Designation	Early	2	1	3
	Middle	10	10	20
	Late Middle	7	5	12
	Late	15	10	25
Total		34	26	60

［図 13- 筋肉の付着部症（ENTHESOPATHY）］

私たちの研究の最後の例は、文化に関するものである。 埋葬番号 101 号の棺の蓋に描かれたハート型のシンボル（30 代の男性で、歯はヤスリで削られている）は、アカン族のアディンクラ・シンボル「サンコファ」を表しているのではないかと我々は考えたが、他の可能性も排除しているわけではない（Perry et al. 2009）。考古学は、絶対的な事実よりも、むしろ妥当性の問題を考える。上顎の中切歯に軽く意図的にヤスリがかけられていることから、アフリカの文化的記憶を示している可能性があるが、歯の化学からみれば（ヤスリがかけられている歯としては珍しく［鉛の暴露は］）西洋人の出生と一致している（Jones 2015）。サンコファは、私たちの調査を通じて広く一般に知られるようになり、アフリカ埋葬地の象徴となった。サンコファは、アフリカ系アメリカ人にとり、現在を知るために、そして未来への指針として過去を取り戻す、という意味がある。アフリカ系アメリカ人が自分たちにとっての遺跡の意味を表象するためにサンコファを選んだとも言える。



［図 14 - 棺の蓋がデザインされた 101 番の遺体］, in W. R. Perry, J. Howson, and A. F. C. Holl. 2009. 'The Late-Middle Group', In W.R. Perry, J. Howson, and B. A. Bianco (eds.), The Archaeology of the New York African Burial Ground, Part I, p. 187.



［図 15-1825 年以前のアドニクラの布に描かれたサンコファ意匠、オランダ国立博物館蔵］

［図 16- アフリカ人埋葬地のサンコファ・エンブレム（米国国定史跡）］

ディスカッション

人間は、記憶という言語によって自分自身を知る。私は私たちをホモ･ルミニセンス、つまり「追想するヒト」と呼んでいる。この呼称は私たち人類が最初から、世界のあらゆる種の中で唯一記憶を大切にする種であることを示している。それ以前のヒト科の生物は、二足歩行を続け、対向可能な手（樹上性形質）を自由にして道具を作り、生産的な時代には屠殺や長距離の食料運搬を可能にし、成熟の遅い子供たちや年長者と食料を分かち合い、それゆえ年長者は彼らと一緒に留まり、彼らの本拠地の囲炉裏で文化を教えることができた（Landcaster and Landcaster 1983）。しかし、その後のホモ・サピエンスをめぐる起源では、考古学的に記録された最初の象徴利用（追悼の言葉）である死者の埋葬やその他の葬儀が、我々の種の独自性として登場する。このことは、私たちがあらゆるイデオロギーをつくりだす能力があることを示している。

この人類に普遍的な特徴が、知識のために人間の尊厳を侵害しようとする人類の研究者たちによってしばしば無視されてきたのは、何とも皮肉なことである。尊厳に対する侵犯の頻度の増加は、経験的に人種差別的、階級差別的、非人間的な眼差しも同時に広がったことを表す。アフリカ人埋葬地プロジェクトは、子孫に対しリスペクトをもって臨むとき、知への探究と人間の尊厳とは相互補完的であることを示している。次の図 17 は、2007 年、私たちが研究室で調査した遺骨が、ブロードウェイを新しい記念碑まで「歩いて帰る」（Blakey 2022）行進の様子である。

［図 17 - 祖先の帰還の儀礼］

死者の取り扱い方を決定するコミュニティの権利を回復するためには、子孫となるコミュニティからの公的関与が不可欠だという私たちのアプローチを採用するケースが増えている。ブラジルのリオデジャネイロにあるプレトス・ノボス墓地では、20 年前からアフリカ人埋葬地プロジェクトが行われている。ウィリアム・アンド・メアリー大学の歴史生物学研究所は、アフリカ系アメリカ人やバージニアの先住民を含め、死者の尊厳とその物語を語ることの主導権を取り戻そうとする多くの人々に助言を与え、またそのようなプロジェクトの促進もおこなっている。公的関与の意味は、多くの場所で使用されることによって拡大されてきたが、時には不幸なことに、実際に「現実のものにする（waking-the-walk）」よりも「子孫のエンパワーメントという見せかけにとどまる（talks-the-talk）」場合が多い（Blakey 2020）。幸いなことに、2018 年、歴史保存ナショナル・トラストは、墓地の保護をはるかに超えた公的関与のための基準を確立した。学者とかつての奴隷の子孫たち 50 人が､歴史保存の基準を設定するために「ジェームズ･マディソンのモンペリエ記念館」に集まった。そのなかで、子孫となるコミュニティが隷属化された先祖の物語を語り、博物館や史跡でアメリカ史を語るとき、奴隷制をその語りの中心に据える必要があるわけだが、学者とコミュニティとの間では「構造的平等」（完全なパートナーシップ）が約束されるべきだという結論に達した。 私たちは、アフリカ人埋葬地がその道を切り開いたと自認している。しかし､「クライアントを優先するモデル」は、この例に限定されるわけではなく、現在でも子孫が適切な管理者である墓や遺骨の扱いについて、広く採用され続けている。地球上どこであろうとも、人間の尊厳という考えに立てば、子孫となるコミュニティが先祖の遺骨の扱いについて最終決定権を持つのである。

おわりに

アメリカ人類学会の遺骨倫理委員会（2022-2024 年）の共同委員長として､私と同僚はウェンナー･グレン財団の資金援助を受けて、グローバル･リスニング･セッションのために世界中を回っている。日本 、オーストラリア、南アフリカ、セネガル、カナダ、イギリス、オランダ、ブラジル、そしてアメリカにおいて、研究者、博物館、教育者によるすべての遺骨の扱いについて、私たちの同僚や子孫のコミュニティがどのような懸念を抱いているのかを知りたいというのがその動機である。私たちは、アフリカ人埋葬地プロジェクトなど、過去の倫理的な活動のごく限られた例しか持ち合わせていない。もし［かつて研究対象とされた］子孫の考えが会話に加われば、考古学と生物人類学の新たな「最良の実践（best practice）」と倫理基準は、すぐそこまで来ていると私は信じている。

参照文献

Blakey, ML 2008 An Ethical Epistemology of Engaged Biocultural Research, In (Junko Habu, Clare Fawcett, and John Masunaga, eds) Evaluating Multiple Narratives: Beyond Nationalist, Colonialist, Imperialist Archaeologies. New York: Springer. 17-28. Re-printed (2010) in R. Preucel and S. Mrozowski (eds) Contemporary Archaeology in Theory: The New Pragmatism. London: Blackwell Pub.

Blakey, ML and Rankin-Hill, Lesley (eds) 2009 The New York African Burial Ground: Unearthing the African Presence in Colonial New York, Vol. 1; Skeletal Biology of the New York African Burial Ground. Washington, DC: Howard University Press. Pp.567.

Blakey, ML 2010. Le Projet de Cimetiere Africain: un Paradigme pour Cooperation? Museum International. Paris: UNESCO 245-246: 64-71 (also in English translation).

Blakey, ML and Rankin-Hill, Lesley 2016 "Political Economy of African Forced Migration and Enslavement in Colonial New York: an historical biology perspective," In D Martin and M Zuckerman (eds) New Directions in Biocultural Anthropology. New York: Wiley-Blackwell

Blakey, ML, Olanrewaju Lasisi and Jessica Bittner 2019 The corporal evidence of northern slavery and its challenges, Symposium on the Current State of the Archaeology of Slavery, Association for the Study of the World-wide African Diaspora Bi-Annual Meeting, Williamsburg, VA, November 6, 2019

Blakey, ML 2020 "Archaeology Under the Blinding Light of Race," Current Anthropology 61, Supplement 22.

Blakey, ML. 2022. "Walking the Ancestors Home: On the Road to an Ethical Human Biology," Anthropology News. 1-2., vol. 14, 1-20.

Goodman, AH, Jones, J, Reid, J, Mack, ME, Blakey, ML, Amarasiriwardena, D, Burton, P, and Coleman, D. 2009. "Isotopic and Elemental Chemistry of Teeth: Implications for Places of Birth, Forced Migration Patterns, Nutritional Status, and Pollution." In Blakey, ML and Rankin-Hill, Lesley (eds) 2009 The New York African Burial Ground: Unearthing the African Presence in Colonial New York, Vol. 1; Skeletal Biology of the New York African Burial Ground. Washington, DC: Howard University Press. 95-118.

Howard University and John Milner Associates. 1993. Research design for archaeological, historical, and bioanthropological investigations of the African Burial Ground (Broadway block). New York: General Services Administration, Region 2.

Jackson, FLC, Mayes, A, Mack, ME, Froment, A, Keita, SOY, Kittles, RA, George, M, Shujaa, KJ, Blakey, ML, and Rankin-Hill, LM 2009. "Origins of the New York African Burial Ground Population: Biological Evidence of Geographical and Macroethnic Affiliations Using Craniometrics, Dental Morphology, and Preliminary Genetic Analyses," In Blakey, ML and Rankin-Hill, Lesley (eds) 2009 The New York African Burial Ground: Unearthing the African Presence in Colonial New York, Vol. 1; Skeletal Biology of the New York African Burial Ground. Washington, DC: Howard University Press. 69-92.

Jones, Joseph L. 2015 The Political Ecology of Early Childhood Lead Exposure
at the New York African Burial Ground. PhD Dissertation, University of
Massachusetts Amherst.

Landcaster, Jane B. and C.S. Landcaster 1983 Parental investment: the hominid adaptation. In How Humans Adapt, ed. D.J. Ortner. Washington, DC: Smithsonian Institution Press.

Owsley, D. W. and Jantz, Richard L. (eds.) 2014 Kennewick Man The Scientific Investigation of an Ancient American Skeleton. College Station: Texas A & M Press.

Medford, Edna 2009 Historical Perspectives of the African Burial Ground: New York Blakcs and the Diaspora. The New York African Burial Ground: Unearthing the African Presense in Colonial New York vol 3. Washington, DC: Howard University Press.

National Trust for Historic Preservation 2018 Engaging Descendant Communities for Interpreting Slavery at Historic Sites and Museums. National Trust for Historic Preservation, Washington, DC.

Perry, Warren , Howson, Jean, and Bianco, Barbara A. 2009 The Archaeology of the New York African Burial ground, part I, The New York African Burial ground: Unearthing the African Presence in Colonial New York, vol. 2. Washington, DC: Howard University Press.

Rankin-Hill, LM and Blakey, ML, Howson JE, Wilson, SD, Brown, E, Carrington, SHH, and Shujaa, KJ. 2009. Demographic Overview of the African Burial Ground and Colonial Africans in New York. In Blakey, ML and Rankin-Hill, Lesley (eds) 2009 The New York African Burial Ground: Unearthing the African Presence in Colonial New York, Vol. 1; Skeletal Biology of the New York African Burial Ground. Washington, DC: Howard University Press. 119-142.

Rasmussen et al. 2015. "The Ancestry and Affiliations of Kennewick Man." Nature, 523(7561):455-469.

（翻訳：太田好信、池田光穂）